

【5-1-k】

旧新潟湊水先案内所<日和山>に関する研究

—街のランドマーク再生のための基礎調査—

A study on the former Niigata port pilotage place <HIYORI-YAMA>.

-A primary survey for renovation of landmark in town.-

○正会員 竹村泰彦^{*1}岩佐明彦^{*2}

TAKEMURA Yasuhiko

IWASA Akihiko

かつて日和山は新潟港の水先案内所であり、その後も櫓が建ち名所として栄えていた。しかし現在は当時の面影も無く、その歴史を知る人も少ない。日和山上空にバルーンをあげ、眺望、街からの見え方を検証した。日和山は階段を登るだけで容易にアクセスできる高さであり、眺望には特徴のある要素が含まれている。現在日和山に自生する樹木によって視界は遮られているが、今後日和山の特徴を留意した上で再生される必要がある。

Keywords HIYORI-YAMA, view, balloon, renovation

日和山、眺望、バルーン、再生

■研究背景

「小高い場所に登り、眼下に広がる自分の世界をじっくり眺めたいという気持ちは、人間の基本的な本能の1つである。」「小高い場所は、見晴らし点としても同じように重要である。つまり、目を見張るように自分の足で登るという作業が必要である。登るという行為は、たとえ2、3段であっても、心を清め、姿勢を正しくしてくれる。」と、C・アレグザンダーは、その著書『パタン・ランゲージ』の中で、都市の中にあり、自分の生活地域を見下ろす事ができる、小高い場所の重要性について述べている。

本研究は、新潟下町(しもまち)を見下ろす小高い場所である日和山を対象としている。新潟市東堀通13番町に位置する日和山は、新潟港の水先案内事業である水戸教発祥の地であり、新潟の文化・政治にも多大な役割を果たしてきた。また、大正末期頃まで櫓が建てられ、町を眺める場所としても新潟の名所となっていた(fig.1)。しか

し、昭和4年、水戸教が廃止され、日和山は街に埋もれてしまい、かつての歴史を知る人も少なくなっている(fig.2)。現在は標高約27mの丘となっており、方角石(fig.3)や年に一度の神楽奉納(fig.4)など、かつての歴史を彷彿とさせるものがわずかに残るものの、頂上では草木が繁茂し、以前の櫓、茶屋は見る影もなく、住吉神社の老朽化も進むなど、整備不足が深刻化している。

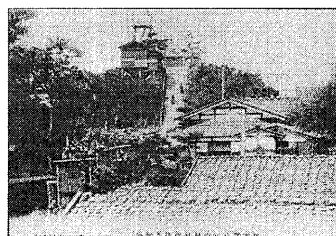


fig.1 以前の日和山

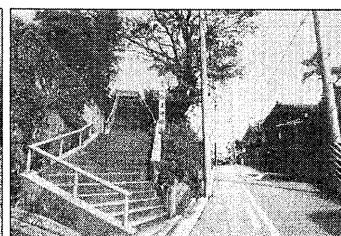


fig.2 現在の日和山

■研究目的

本研究は、日和山の現状を明らかにすると共に、以前より新潟にとって非常に重要な場所である日和山を、今後現代的にどう再生していくか検討を試みるものである。

*1 新潟大学大学院自然科学研究科博士前期課程

Graduate School of Science and Technology, Niigata Univ.

*2 新潟大学工学部建設学科准教授・博士(工学) Assoc.Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Niigata Univ., Dr. of Eng.

■「日和山」について

江戸時代の和船は、その作りから風に向かって進む事ができず、順風を待ち出帆した。したがって、天候の善し悪し、風向きは重要であり、船頭は港近くの小高い丘を選び、日和を判断した。そのため、天候を見る為に利用した港近くの小高い丘は「日和山」と呼ばれ、全国の至る所に存在した。現在では地名として残り、公園等に整備されているが、一方で宅地化や都市開発によって平地化した所や、地名が消失してしまった所もある。

■調査概要

かつて、日和山はその役割と立地条件によって、周囲よりも小高く信濃川や街を一望する事ができ、さらには街の様々な所からも視認できる場所であった(fig.5)。そこで、現在、日和山は街から視認できるのか、日和山からはどのような眺望が得られるのか、日和山上空にバルーンをあげて調査を行った。また、周辺住民と日和山の関わりをヒアリングした。

(1) 日和山の街からの見え方調査(調査日: 200年10月9日、10月22日) 現在では、街から日和山がどのくらい見えているか、見え方の現状調査を行った。街の中で視界がひらけ、展望できる場所(眺望点)を周り、バルーンを目印とし、日和山が視認出来るか調査した。また、元新潟市郷土資料館員である森田一郎氏が推測した1680年信濃川と阿賀野川の流路と、現在の新潟市の地図を重ね、かつての河口であったエリアを含むように、日和山から半径約1kmの範囲の主な通りを同様に調査した。

(2) 日和山上空からの眺望調査(調査日: 2006年10月9日、10月22日) 次に、日和山からの眺望について調査した。櫓からの眺めを想定し、バルーンにデジタルカメラ、デジタルビデオをつり下げ(fig.6)、日和山上空1.5m、5m、10m、15m、20m、25mの高さで景色を撮影し、360°のパノラマ写真を作成した(fig.7)。

(3) ヒアリング(調査日: 2006年10月9日、10月22日、10月28日、10月30日) 日和山は、周辺住民にとってどのような場所なのか、また、日常生活とどう関わっているのか、調査中に日和山に訪れた人、周辺住民へのヒアリングを行った。

■調査結果と考察

(1) 日和山の街からの見え方 日和山から半径約2kmの範囲内にある、ほとんどの眺望点(展望台など)から、日和山は視認可能である事がわかった(fig.8)。日和山に櫓を再建した場合、広域から視認されるものとなる事が予想される。また、日和山から半径約1kmの範囲内の主な通りからの見え方に関しては、ごく周辺の通りを除くと見える場所は少なく、以前の信濃川河口に位置したエリアからもほとんど視認する事ができなかった。しかし、奉行所に面し、新潟町創建時の重要な都市軸である西堀通

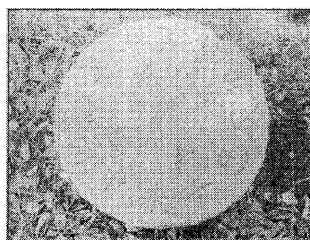


fig.3 方角石



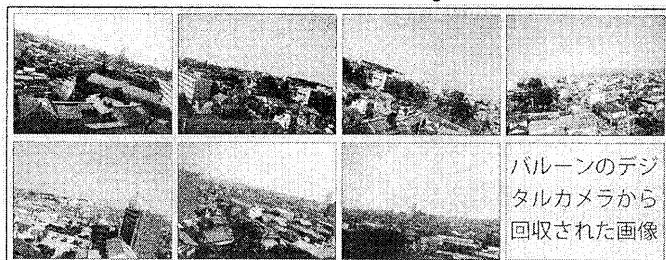
fig.4 神楽奉納

主な役割	立地条件
(1) 日和を見ること	(1) 外海または大灘等に面したる港であること
(2) 出船を見送ること	(2) 出船、入船の多い港であること
(3) 入船を望見すること	(3) 港の一角の余り高くない小山であること
(4) 入船と連絡をとること	(4) 舟繋ぎ場から余り遠くないこと
(5) 入船の目印となること	(5) 港内を見下ろせる所であること
その他の役割	(6) 港外の湍筋を遠く見渡せるところであること
(1) 遊覧場所となること	
(2) 商人の商況判断の資料を得ること	
(3) 唐船見張番所の設置と砲台の築造	

fig.5 日和山の役割と立地条件



fig.6 バルーン調査の様子



バルーン
のデジ
タルカ
メラか
ら回収
された
画像

▽加工する

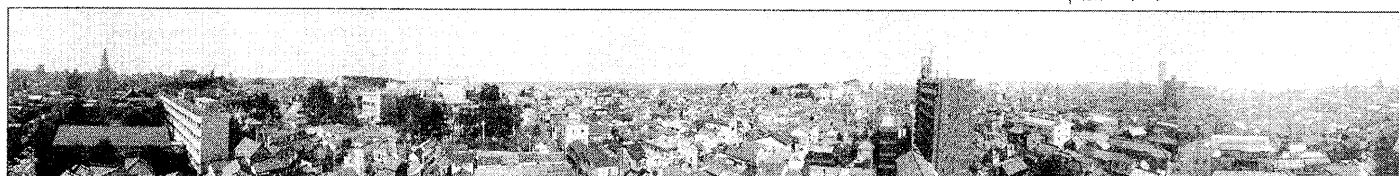


fig.7 パノラマ写真の作成

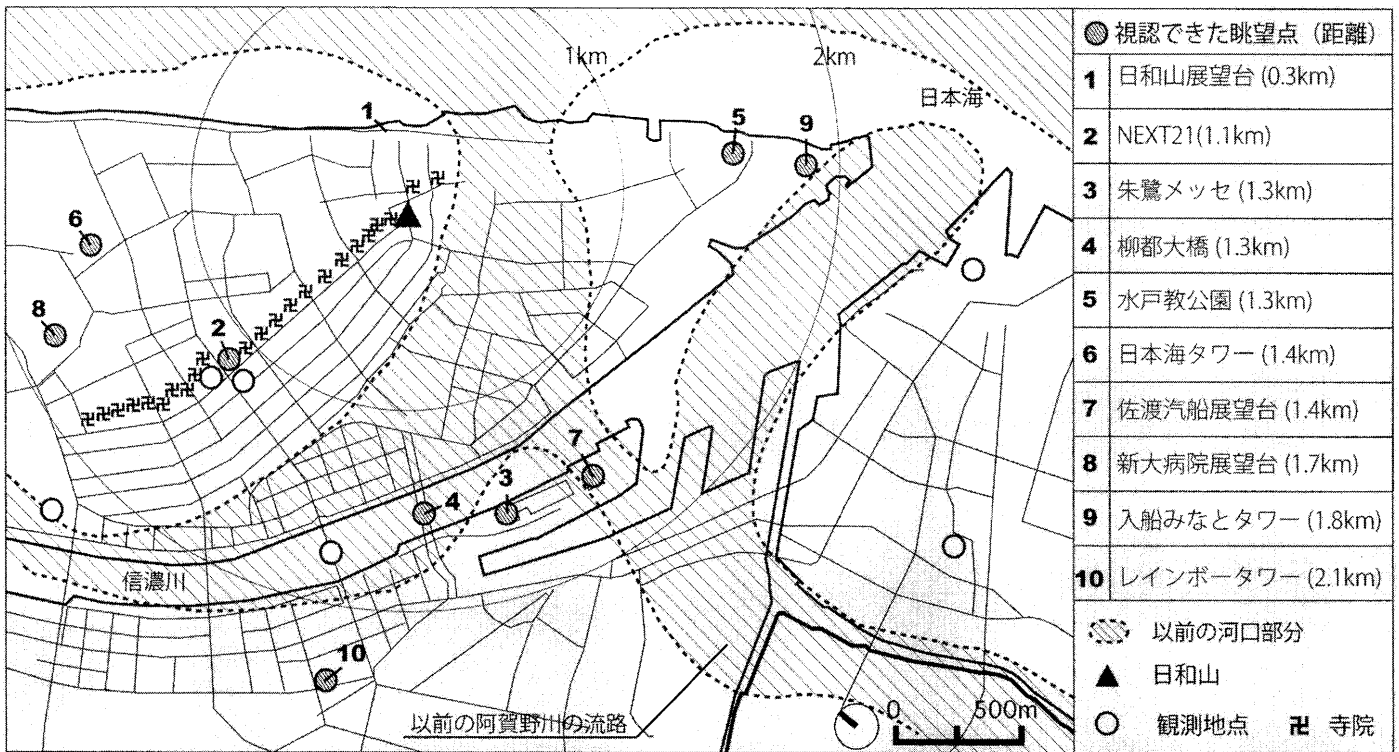


fig.8 日和山が視認できる眺望点

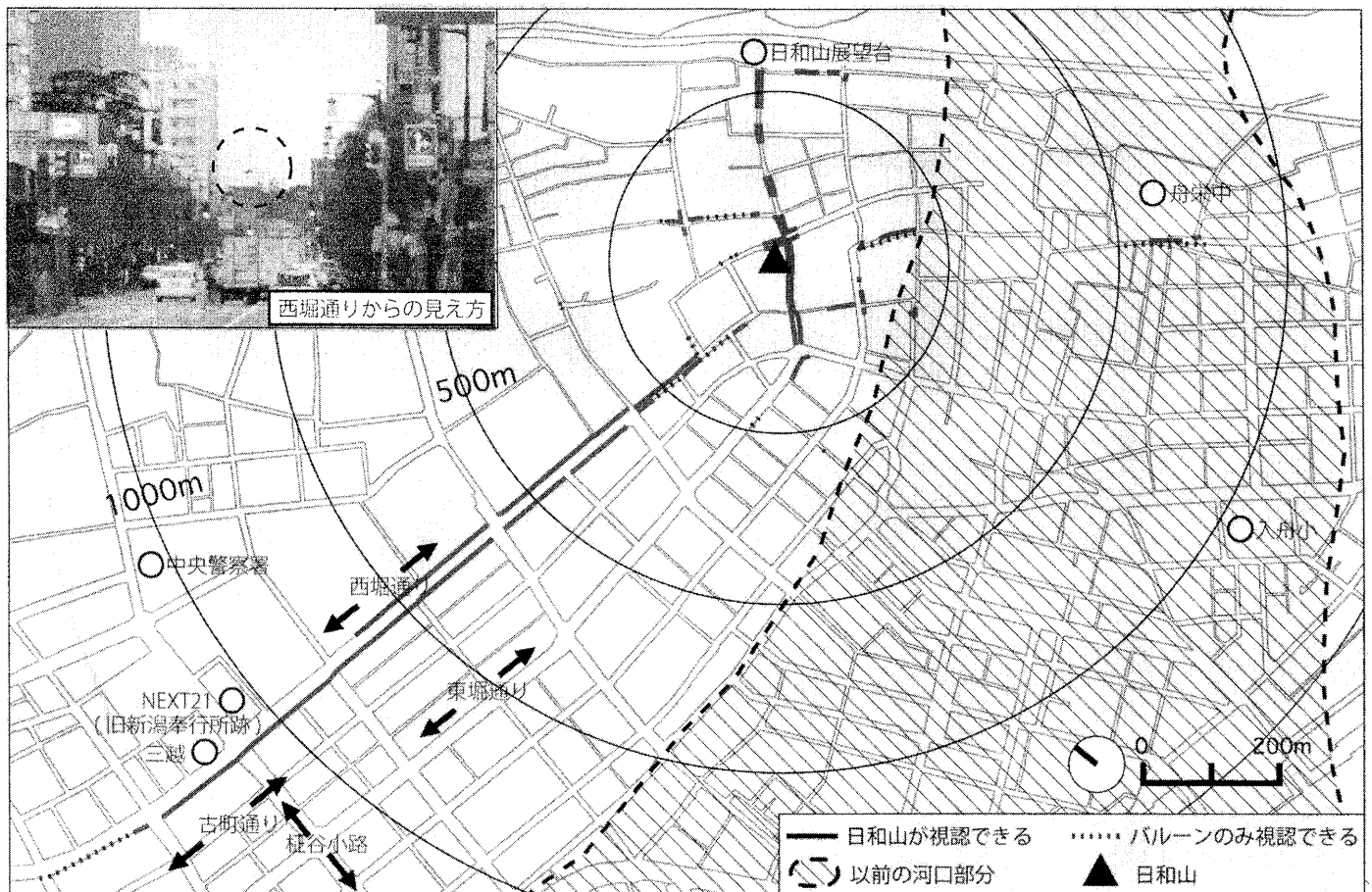


fig.9 日和山が視認できる通りマップ

りからは、約 1.3km 離れても視認する事ができた。よって、新潟町創建時の都市軸が日和山と関連づけられている可能性が指摘できる(fig.9)

(2) 日和山上空からの眺望 現在の日和山からの眺望に関して、周辺には、マンションがあり、家屋なども密集

しているものの、視界を妨げている大きな要因は、周辺の樹木の成長である事がわかる。したがって、日和山から眺望できる範囲は、わずかしかないが、樹木の管理が行き届いていれば、家屋が立ち並んだ今でも、その眺望

は失われていないといえる(fig.10)。また、大正末期頃まで建てられていた櫓の高さを15mと推測し、撮影された上空15mからの眺望を検証した結果、市内のランドマークとなる建物のほとんどが視認できる他、西堀通りやそれに沿った寺町の寺院など、この場所特有の街の見え方が、日和山からの眺望の要素の一つとして含まれている事がわかる(fig.11,fig.12)。

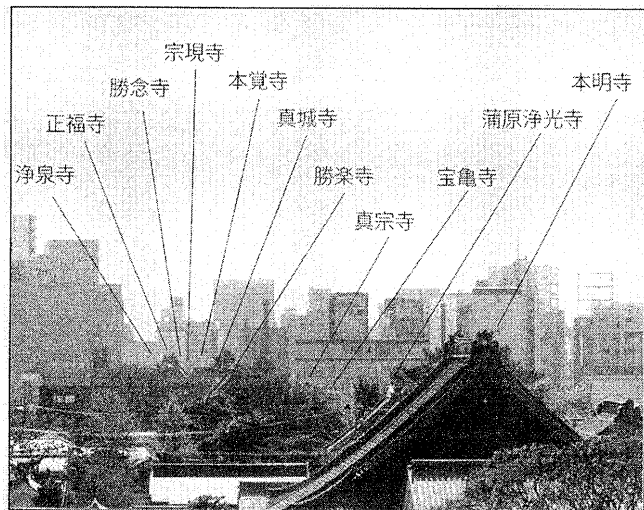


fig.12 寺町の寺院の並んだ特徴のある風景

(3) 周辺住民にとっての日和山 日和山は、犬の散歩や、毎日のウォーキングの際に立ち寄る人がいる事や、昔から子ども達の遊び場としても使われている。また、周辺住民の中には、以前の新潟花火のあがった方向や、ここ数十年間で街の見え方が大きく変わったなど、眺めについて共通して話す人が多かった。周辺住民は眺望と街の情報を結びつけて記憶している他、眺望に関してそれぞれが場所の読み取りを行っており、日和山が住民の生活と深く関わっている事がわかる(fig.13)。

■まとめ

水先案内所としての仕事を終えた日和山は、現在でも周辺住民の生活や、街の記憶と深く繋がっており、日常的に自分の生活地域を見渡す事のできる場所であるという事が、バルーンを用いた眺望・見え方の検証、周辺住民へのヒアリングを通し、明らかになった。街の構造を俯瞰する事ができ、階段を登るだけで容易にアクセス可能な日和山は、自分が生活する街を知るのに非常に適した場所と考えられる。したがって、現状では、眺望を確保する事が課題であり、樹木を越える櫓を設置する、もしくは櫓を設置しなくても、樹木を取り除くなど、日和山を再生する必要がある。また、櫓を設置する場合は、市内の至る所から視認される為、日和山の今後のあり方をよく留意した上で、デザインする必要がある。

■参考文献

- 南波松太郎『日和山』、法政大学出版局、1988年
- 森田一郎『新潟港日和山を語る』、2002年
- C・アレグザンダー『パタン・ランゲージ-環境設計の手引』鹿島出版会、1984年

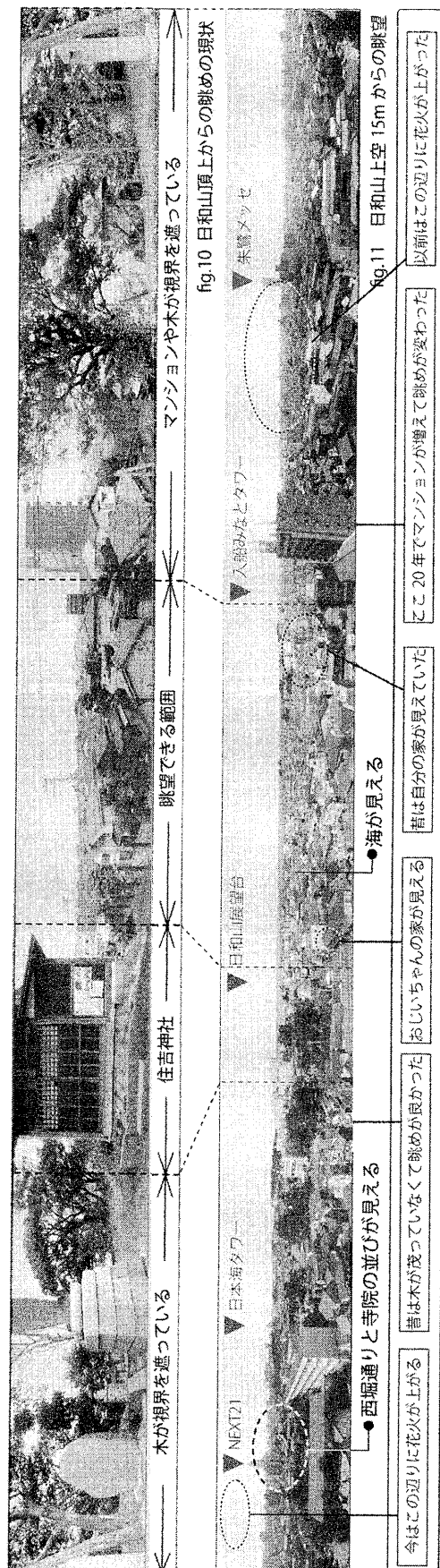


fig.13 眺めに関するヒアリングによるコメント